

【母性の‘コンテインメント(包容力)’とは何か】

—ウイニコットの‘good enough mother’概念をめぐる— (1975)

Martha Harris

[※原題: Some notes on maternal containment
in ‘good enough’ mothering]

この論文ではまず最初に、乳児の誕生間もない数週間の母親との交流をめぐり、その観察されたディテールに深く踏み込んで考察するとき私が最も有益と思うところの理論 theories に言及してみようと思います。それら理論は、乳児観察で徐々に明らかとなる‘形態 configurations’ (Bick 1964) を児童ならびに成人の分析的セラピーにおける転移現象 transference phenomena に結びつけ、比較検討することに大いに役立ちますし、そうすることでそれらどちらについてもいっそう稔り多い理解をもたらすように考えられます。

それからその次には、赤ちゃんの生後間もない数週間の間に観察された2つの事例から幾つかまとまりのあるシーケンスを提示することにいたします。いずれもがごく恵まれた家庭環境の中で観察されております。そして引き続き、或る若い母親の分析症例なのですが、その治療のごく初期の頃のものを抜粋して語ってまいります。この方は妊娠中に突発的な不安感を覚え、赤ん坊の出産後にも深刻な抑うつ状態に陥り、それで治療を勧められて私どもに来所されたというのが事の経緯であります。

さて、ここでの理論とは、子どものパーソナリティに‘適切なコンテナ—an adequate container’になるべく、プライマリーな母性対象の精神的成長 mental growth にとって必須条件となるのは何かということ、すなわちそれはウイニコット(1965)によって述べられているところの‘ほど良い good enough 母親’ということでありますが、そうしたことに関連しております。‘ほど良い good enough’と敢えてされる構成因子についてであります。それはどのくらい‘good’であらねばならぬかといった、どちらかという量的な違いが問われておりますようですが、それぞれ個別に母子間相互のディテールを綿密に観察してまいりますと、そうした違いとは別によりいっそう質的なものが構想されることになろうかと思われ。つまり、‘ほど良い’ということの構成因子であります。さらには、個々の母子関係がそれぞれにユニーク(特異)であり、そしておそらくは母親の気性と赤ちゃんの生まれながらの気質といったもの間に‘相性がいい fit’ことが重要であるといったことがよりいっそう説得力をもって認識されてまいります。

フロイトが「自己愛(ナルシズム)」の現象を1914年に発見したとき、彼の考えでは、それは‘自体愛(auto-erotism)’から対象関係 object-relations へ向けての発達でありました。すなわち子どもは彼自身の身体を対象化しているわけであり、それもそれが親の身体と同一化され、両者になんら区別のないものとされる限りにおいてなのであります。フロイトは、こうした発達を自動的 automatic なプロセスと見做し、それを《一次的ナルシズム primary narcissism》と名付けたのであります。

メラニー・クラインは、「ナルシシステックな同一化 narcissistic identification」は個々の精神的メカニズムによってもたらされるのであって、決して自動的なプロセスではないとの見解をいだくに至りました。結局のところ、彼女は1946年、このメカニズムが「万能感的空想 the omnipotent phantasy」によって起きることを詳述し、「投影同一視 projective identification」と名付けたわけであります。こうした空想において、子どもは一時的に‘己れ自身の望まない部分 unwanted parts’を対象へと「分割排除 split off」するわけなのですが、このメカニズムの過剰な活用は‘病理的な発達’、例えばパーソナリティの枯渇化及びアイデンティティーの感覚の障碍’へと導かれる、と彼女は信じたのであります。

メラニー・クラインはそのごく初期の業績から(1921)、子どもたちの内に‘認識愛的衝動 the epistemophilic instinct’が認められると、その重要性を強調しております。それら生得的な願望とは、すなわち世界に向けて手を伸ばし、知ろうとする衝動といえましょうが、とりわけ母親の身体についての好奇心において表出されるのであります。その内には空想されたスペースがあって、そこはさまざまな対象やら内容物によって占められているというわけであります。つまりは、これが子どもの想像するところの世界の原型 prototype なのであります。

ピオンは、その論文【A theory of thinking】(1962)そして【Learning from Experience】(1962)の中で、これら「投影同一視理論」と「認識愛的衝動」とを繋げております。そこでは「経験から学ぶ能力」の起源についてよりいっそう光が当てられております。彼が語っておりますことは、乳児にとってその抱える痛苦 distress の排出を受け入れ、それについて深く配慮し、適宜反応してくれるといった母親が必要とされているということであります。もしこれがその通りに起こり得るならば、子どもは慰められると同時に理解されたという経験を味わうことになるわけであります。子どもは己れのパーソナリティの‘排出された部分’を別様にもっと改善されたかたちで再び引き受けることになるわけですが、そこにはそれに耐えてもくれ、考えてもくれるところの対象を経験するということが同時に含まれるのであります。このようにして、ピオンのいうところの母親の‘夢想 reverie’の能力を摂り込み、子どもはどのようにか己自身に耐えられるようになり、そして自分自身やら外界についても、それらが有するところの‘意味’を理解してゆくことになるわけです。このように子どもの痛苦 distress に対して母親がうまく反応し得なかった場合ですと、その結果として「理解すること understanding に敵対する対象」が摂り込まれることになりましょう。それも己れ自身の畏怖された部分 frightened parts と一緒に…。つまりのところ、それは何ら反応を惹起し得ないわけですから、(まるで訳が分からないといったふうに)意味は喪失されたままです。そうして‘名付けようのない恐怖 nameless dread’として経験されることになるわけであります。

エスタ・ビック(1968)は、母親のコンティンする機能について、もう一つ別の観点から検討を加えております。彼女は、子どもはプライマリーな未統合状態においてそのパーソナリティのバラバラな部分を統一的に抱えてくれる対象を必要としているということを語っております。その最たるものは口の中の乳首であり、他にも例えば母親の慣れ親しんだ抱っこやら語りかけ、そしてその匂いといったものでして、そんなふうに子どものさまざまな感覚的ニーズは満たされるわけであります。こうしたプライマリーなコンティン

メント、もしくは‘皮膚’機能(‘skin’ function)の発達がうまく促進されなかったとしたら、その理由として考えられるのは、それが対象の有する何らかの欠陥 defects から生じたのかも知れず、もしくは子どもの中に摂り込まれたなんらかの‘空想の攻撃 phantasy attacks’がゆえにその子の統合された(そして統合されつつある)心のあり様が損なわれたといったことでありましょう。

こうしたプライマルな皮膚機能における障碍は、ビックのいうところの《二次的皮膚構造 second skin formation》の誘因になるともいえましょう。そこでは、内側において支えてくれる対象に対する信頼性(reliance and trust)が、筋肉質な muscular 類いのものへの不安定で脆いともいえる依存に取って替わられるのでありまして、子どもが自らを抱えるために備わった感覚的および精神的な能力 equipment を積極的に有効活用するといったこと、それは普通には摂り入れやら投影でその機能が発揮されるわけですが、そうした状況にはないわけでありまして。それはいずれパーソナリティの‘二次元的タイプ’といった様相を呈することになりましょう。そこでの同一視とは、‘粘着性 adhesive’のものであり、表面的にひとのあり様を擬態もしくは模倣することが摂り入れやら投影をとおして「経験から学ぶ」といったことに取って替わられてしまうわけでありまして。

パーソナリティの統合の基盤なるものをコンテインし、かつ下支えするところのプライマリーな対象を摂り込むことの挫折は実に多様なかたちを取りますし、その程度もさまざまに違って表れます。自閉症そして機能精神障害といった極端な例から、浅薄さやら表面的といったような、もしくは深い情緒的な関わりが不可能だったり、たとえ出来たとしても不承不承といったように(Meltzer 1975)、さほど明らかではないものの病的だったり、もしくは成長が妨げられているといった状態が挙げられましょう。ここから窺われますことは、コンテインされていない non-containment、二次元的 two-dimensionality ともいえる、または空っぽ mindlessness といった心の領域そして状態は、どの子どもにもその発達上あり得るわけですし、そうであればまたわれわれ全てについても等しくそうとも言えるのであります。

これらの理論は、これから提示いたします乳児観察の記録のいくらか恣意的に選びましたところのシークエンスの意味するところに光を投げかけてくれる、実に得難いものと私は考えております。どちらの事例においても、観察者は実に多くの事の詳細を深く心に留め、真摯に記録を綴っております。そして観察された対象が関係し合っている情緒的な雰囲気についても十分に配慮を怠っておりません。ややもすると記録上圧縮された要約および抜粋からはこうした点が見逃されやすいので、公平を期すためにも、予めそれをここで明記しておきます。

■2事例の赤ちゃん観察ノートから;

チャールズ

チャールズは、専門職であります30代前半のご夫婦の4番目のお子さんです。他の3人の子どもたちは5歳未満で、母親は最初の子どもを産んだ後からずっと休職しております。父親は大概仕事

から早めに帰宅し、積極的に上の子どもたちの世話を引き受け、大いに妻の手助けとなっております。観察者は、家庭内の雰囲気はとても活気があり、ぬくもりもあって、歓迎されていると感じておりました。それに、母親は観察者とお喋りするのを喜んでいるふうで、とても熱心な印象をも抱きました。

観察者は、赤ん坊が生後1週間を過ぎた頃初めて訪問したわけですが、赤ちゃんはコットの中で眠っているばかりでしたから、殆ど観察はされませんでした。母親がどちらかという、帰宅した夫に他の子どもらを任せて、邪魔されずに観察者とひたすら話をしたがっているように思われたからなのです。Mrs.Cは子どもらすべてについて大いに語りました。まず最初の二人の子どもの場合、どちらもが幾らか未熟児でありましたので、出産後保育器の中で数日間過ごしたということでした。すなわち授乳をオッパイで与えるということに手こずったということになります。3番目の子どもは楽だったそうです。それで、これまでのところチャールズも万事うまくいっているみたいなので、育てるのに楽な子どもであってくれたらいいなと望んでいるところなんだそうです。他の子どもらは、末の弟の彼をどうにか受け入れたもようであります。実のところ、3番目の子どもが、彼女の妊娠後期にお腹の‘ふくらんだ出っ張り the lump’目掛けて殴らんばかりの攻撃性を向けたということがあり、それでいずれ問題を起こしはしないかとちょっと案じていたんだそうですが・・。

彼女は分娩後、すぐさま赤ん坊を抱きかかえさせてもらったとのことで、それが嬉しかったと語っています。その折に気づいたのは、母親が話し掛けてやると、その声をそれと分かったかのように赤ん坊は母親の方からだを向けたとのことです。彼女は、彼がすでに辺りの物に焦点づけをし始めていると考えております。なぜなら、彼は部屋の中でお兄ちゃんたちが遊んでいる方向に眼を向けてそちらをジッと眺めていることがあるからです。それから時折、オッパイをふくませていると、赤ちゃんがふと吸うのを止めて、いかにもベッドの脇にあった時計のチックタック鳴る音に耳を傾けているふうにも見えたからです。

最初の観察では、チャールズは蛙さんみたいにお腹を下にうつ伏せの状態、頭を光の方に向けて、ぐっすり眠っておりました。これまでのところ赤ちゃんはどうか頭だけは動かすことができ、うつ伏せに寝かされると頭を横へ向ける、と母親から報告もされました。

その次の回では、チャールズは生後2週間半でありましたが、蛍光灯の光の方に向いて、うつ伏せになって眠っておりました。母親はどうやら憔悴しきったふうでした。なぜなら3時間ごとに赤ちゃんを起こして授乳しなくてはならなかったからです。彼女にしてみれば、そろそろ4時間ごとの授乳スケジュールに切り替えられたら助かるんだけどと内心思っておりました。彼は目覚めかけたようです。指を口に押し込もうとするかのように見えました。でもその指はまだうまく開いてはおりません。そこで指の付け根の辺りを吸う動作をしました。それから徐々に動きはからだ全体に及び、左足を蹴り、右肩と頭をコットの端へとグイグイ押しやります。クンクンと哀れっぽい声をあげたり、ちょっと泣き声も聞かれました。それから、眼を開けたり閉じたりを何度か、傍らのコットをジッと見入っているふうでしたが、それからからだ全体をググーッと持ち上げ、背を丸めました。

母親が彼を抱き上げますと、彼の手の指がまるでヒトデみたいに大きく開きました。ちょっとビクッと驚いたふうな反応をしたようです。彼女は、ベッドの上に座って脚を伸ばした恰好をし、それから左のオッパイを出す間、彼を自分と向かい合わせにその脚の上に乗っけておりました。それから彼は、ゴクゴクと力強くオッパイに吸い付きました。見るからにものすごい集中力です。それから直に、間近にあるオッパイに目を細めて見入り、それを支えている母親の手にしっかりとしがみつきます。どうやら彼は何かしら内側ものを外へ出そうとしているようでした。ちょっと唸り声をあげ、彼の顔が赤く力みます。母親は、時折彼はそんなふうにはどく気張ることがあり、それでくたびれるのかいつの間にか眠ってしまうことがあるんだと語ります。ほんの少しゲップをした後に彼の手はリラックスし、傍らにだらりと下がります。5分後に母親は彼をオッパイから引き離し、肩にもたれさせてから立て抱きにして、それからやさしく彼に話しかけます。彼は彼女の顔に焦点づけようとしているふうでしたが、やがて母親の後ろの壁に視線を移します。ゲップを出す前、彼の顔、身体、手などが開いたり閉じたりし、それで体は一つになるやらバラバラになるやらで、彼の顔も引きつったようにクシャクシャになり、それからリラックスするのです。母親は再び膝の上に彼を抱き上げ、足の爪先が母親の胃の辺りを指すような体位を取らせます。彼の手足は飛び上がるふうな恰好でしたから、いかにも無重力状態の宇宙飛行士みたいなのであります。彼女は彼に再びやさしく話しかけてやり、彼の手を自分の両手で掴んで、胃の辺りにまで下ろしてあげます。それからオムツを換えるのに彼をマットの上に横にしました。<いつもだと、オムツ交換されるのを嫌がるのよ>と言いながら。。

この度はどうか彼は‘いい子’だったというわけですねと事が運びました。レギンスが脱がされると、その途端彼の脚はビョンと高く跳ね上がりました。まるで無重力みたいに。。それはちょっと前のビクッと驚いたふうな手の動きにも似ています。母親が、クリームを彼の性器やらお臍の辺りの湿疹に塗っている間、<クリームを塗ってもあまり大して湿疹がよくなるのよね>と語ります。彼はじっとしたままで動きません。彼の脚にレギンスを穿かせます。彼は、彼女の手さばきそしてその動きの音にまったく全身を集中させておりました。彼の眼の動きは3つの方向に向かっているようです。この間の母親の動作を眼で追っていることが一つ、それから自分の手がヒョイヒョイと視野の内に飛び込んできたり、その手が上へと持ち上がったりのにも気を奪われておりました。レギンスを穿かせられると、どうやらよりしっくり体が落ち着いたといったふうに見えました。彼の足は再び動き回り始めましたが、あちこちへとバラけたふうではなく、どちらかというより統制が利いていて、それらは彼のからだの一部としてきちんと収まるどころに収まってるといった感じでした。この間、彼は一度だけ観察者の方に眼を向けます。それは彼女が母親と話しているのを耳にしたときにであります。

母親は観察者に赤ちゃんを手渡し、抱っこを勧めます。<どんなふうか、ちょっと触ってごらんになったら。。>と言いながら。彼は、どうやら彼女が着ていたブラウスの縞模様に魅了されたらしく、眼でそれらをなぞってゆきます。それは、彼がコットで寝かされているときにコットの柵にジッと眼を凝らしているのに似ております。母親が彼を抱き取ると、彼の舌は出たり引っ込んだりしました。母親はコットに彼を寝かせ、オムツを背中のお臍に敷いて、光の差し込む方向、つまり窓の方を見ることが出来るようにして

やります。彼女が去ると、彼のからだはコットの隅の方へほんの少しだけじり寄ったかのようです。その動きは以前にも見られましたが、今回はさほど顕著ともいえません。そして、いつもそうするように眼をリズムカルに動かしながらコットの端の辺りを頻りに眺め透かしておりました。

これら最初の頃の訪問では、観察者は母親にあたたかく迎えられたと感じております。どうやら母親は子どもたちについて、日頃心の内に溜め込んでいたありったけを観察者に話したがっていたみたいで、それで彼らからも家庭内の煩雑さからしばし逃れてちょっと息抜きしたいと思っていたように覗われます。一見して家庭内での暮らしぶりは秩序があり快適そうでしたが…。観察者そして赤ちゃんのいずれに対しても母親はやや隔たりのある、引きこもりの状態にあったみたいでして、それは最初の週そして最初の月頃まで続きました。

それから2回目の訪問のことですが、チャールズに或る著しい特徴が観察されております。彼は授乳のとき、そして注意 attention が何らかの外的刺激によって支えられているときなど、かなりの集中力を示すわけですが、それと対照的に、からだの移動の瞬間とか母親の腕にしっかりと抱きかかえられていないときなど、彼のからだはビクッと跳ね上がり、いかにもからだ全体がバラバラに崩れ落ちんばかりの反応をします。彼の集中力は、母親との身体的接触やら、或いは視覚的もしくは聴覚的な何かに注目することで直ちに取り戻されました。例えばコットのパターン、観察者のブラウスの縞模様、話し声、そして時計のチクタクの音などです。彼は始終どこなく気を張っている印象で、大して無理せずともゆったりとコンティンされているといったふうなのはごく稀であったわけですが、それは例えば、彼が衣服を着せられボタンをしっかりと留めてもらったり、母親に彼の両手をそのからだにしっかりと引き寄せられ話し掛けてもらうときなどとても顕著でありました。

この1週間後、チャールズは生後3週間半でした。彼は授乳直後に観察されたのですが、頭を再び光の方へと向け、目は半分開いた状態でコットに寝かされておりました。母親が彼を抱き上げたとき、彼の下唇は明らかに震えており、彼はその手を目の前に握りしめ、母親の顔に見入っておりました。彼女は彼を膝の上に横抱きにし、彼のからだを前と後ろの両面から支えておりました。彼女が頭を動かし、それで光が彼の顔に落ちてきましたため、彼はちょっと眼が眩んだふうで、一瞬混乱した趣きを呈しました。生真面目な集中した目付きで再び熱心に時計のチクタクの音に耳を傾け、そちらの方角を眺めておりましたが、やがてどうやら落ち着いた感じを取り戻したふうなものでした。

この時計の音にしばらく集中した後、彼の唇は突如激しく震え、握りこぶしを振り上げて、それらを激しく上下します。まるっきり突発的にパニックが内側から噴き出したみたいでした。母親はこれに对应して、彼に顔を近づけて、その胴体をきつくしっかりと懐に抱えてやりました。すると彼はもう一度、彼女の顔に焦点づけを試みんとしました。ここで Mrs.C は、彼が近頃はもう頭と肩を支えられるようになり、首の座りがだいぶしっかりしてきたということを語りました。それから彼女は彼をベッドにうつ伏せに寝かせます。手足を這い這いできるような位置にしてやったというわけです。こんなふうには毛布で覆われますと、

彼はコットの中でからだを目一杯に持ち上げて起き上がろうとします。しばらくぐずり声をあげておりましたが、指の付け根を見つけて吸い始め、やがてそのぐずり声も止まりました。彼の眼は依然として能動的であります。左目はコットの柵をリズム的な動きでジッと眺め透かしておりましたし、それも以前よりもずっとはっきりしていて、焦点も合っているようでありました。やがて徐々に眼は閉じられてゆきます。観察者は、彼のからだはその週の前迄と比べると、よく纏まり統合されてきた感じがしたと記録しております。その肢体がバタバタと無闇に空中を引っ掻き回しているというよりも、むしろ自分で意図的に動かしているといった印象を与えたということになりました。

この訪問では、母親はやや疲れ気味で、からだの緊張が抜けず、幾らか落ち込んでいました。他の子どもたちがさまざまに要求を訴えることが多く、それに観察者ともなんらかの接触を求めたがっていることにも気づいておりました。実際のところどう挨拶したものやらくは分からないなりに、彼らにしてみれば、もはやくお行儀よく振舞うということでは十分ではない！>といった感情を懐いていたということになりました。観察者は、この頃、チャールズが以前と同じように「外的対象 external object」に視覚的・聴覚的に頼ろうとする傾向 visual and aural holding があるといったことを記録しております。それと並行して、下肢をコントロールすることには格段の進歩が見られ、どちらかというより一体感が増してきているのが認められます。Mrs.Cの抑うつ感、そしてこれと言って定かではないにしろ彼女自身なんらかの接触への憧れを募らせていることはいっそう顕著に覗かれております。

この1週間後、チャールズは生後4週間半でありましたが、彼はオッパイよりも哺乳瓶で授乳される頻度が増えてきております。母親によりますと、彼はコットに寝かせられておりますとどうも退屈するらしく、だから「人生を覗き見る look at life」ことをやりたがってるといいましようか、コットから出してもらってあちこち部屋の中を連れ回してもらいたがるとのことでした。この日、二度目ですが、彼の入浴場面が観察されました。母親が彼のベビー・グロー（おくるみ）を脱がせますと、彼の腕は以前にもよくやったように突如前方へと跳ね上がります。レギンスが脱がされたときも、脚が同様の動きを見せました。彼は彼の後ろで観察していた観察者の方からだをグイッと引っ張るように振り向き、彼女の姿を見ようとしました。母親が膝の上に彼を抱きかかえ、髪の毛を洗おうとしますと頻りにもがきます。<どうやらやっぱりお風呂に入るの、好きじゃないみたい・・・>と母親が言います。オムツが外され、裸のまま母親の膝の上に抱えられながらも母親の顔に釘付けになったみたいにジッと見つめておりましたが、彼の顎はかすかに震えております。お湯の中にからだを浸されたとき、彼の顔は恰も‘ガタッと崩れ落ちた’ふうになります。ほんの一瞬反応が途切れて、それから彼は怒りを露わに奮い立ちました。彼の顔は赤くなり、皮膚の色は白からシミだらけの赤と青へと変貌しました。恰も‘悲劇の仮面’とでもいっていいような真実の怒りを呈しております。母親はすばやく彼のからだを洗ってやり、その頭の下に手を当て支えてあげながら、なだめようとしています。それから彼女は彼をマットへと戻しましたが、彼の怒りは容易に止まず、依然続きます。身体を拭かれている間、彼の両脚は自転車のペダルのように上下しておりました。お尻の湿疹はまだあり、その辺りに母親がクリームを塗っている間も彼の気が紛れることはありません。しかしながら、彼の足にレギンスを穿かせられますと、彼の怒りは突如として静まりました。彼の両手は、

彼の眼の空を掴むような仕草でバタバタと落ち着かず、服を着せられている間にさらに強張り突っ張らせたため、彼に服を着せようと躍起になっている母親に幾分難儀を強いたこととなります。が、まもなく彼はおとなしくなり、ジッとしたまま前方を眺めておりました。母親は彼と一緒に椅子に腰掛け、そして腕を曲げた恰好で彼を抱っこしてやり、リラックスして彼に哺乳瓶を与えます。

彼は最初、乳首を拒みます。それからごく順当に、母親の顔に見入りながらゴクゴクと音を立てて飲み始めました。そうしながらもその左手はしっかりと胸当てを掴んでおります。お腹のなかがいづらか満たされたからでしょう、彼の両手は次第にリラックスし始めます。この授乳の間、彼は3回も大きなゲップをしました。最初にゲップをした折、母親は彼が身に付けていた胸当てを手にして、彼が戻したものを受け止めようとしてしました。全部が彼の胃から出てきてしまうのを恐れるかのように…。2番目にゲップが出そうに思われたとき、彼を肩に乗せ、立ち抱きをしました。そしてゲップが出たとき、彼のからだは彼女のからだの上にぐったりと沈み込んだふうになります。彼が3回目にゲップをしたとき、彼は顔を乳首からどかしました。そこで母親は彼をコットへと運び、寝かし付けます。彼はすぐさま天井からぶらさがってユラユラ揺れていたモバイルに眼を遣りました。彼はぐずり続け、全然落ち着く気配がありませんから、母親は彼をコットから抱き上げ、椅子に座らせました。そこで彼は生真面目な顔して不安げに座っておりました。そしてまなざしを最初に母親、それから観察者の方へと遣りながら、手足を目一杯にバタバタと動かしており、恰も何やら掴めるものが欲しいといった感じが濃厚に覗われました。母親がその後、彼を椅子から抱き上げ、膝の上に座らせましたとき、彼は彼女の顔に向けて微笑をしようとしたふうでしたが、うまく表情筋をコントロールするには至らず、その微笑も残念ながら‘尻すぼまり’に終わったのであります。

この日の観察で、チャールズは哺乳瓶を与えられるようになっておりますが、彼の服が脱がされ、お風呂に入れられるとき、下顎がかすかに震えていたことや顔が‘ガタッと崩れ落ちたふうだった’と観察者が書きとめていることは殊更に重要かと思われれます。これは彼がまったく何も身に付けられない裸んぼうで入浴しているのを見た最初でありまして、ですからこうした強烈な反応は、そうした状況では珍しくはなかったものとも思われれます。しかしながら、この下顎の震えと顔の表情がガタッと崩れたということを考えますと、あれほどに必死になってしがみついていたと見られるオツパイの乳首が彼の口から引き剥がされてしまったということに特に関係していたのではなかろうかという気がいたします。哺乳瓶を与えられたとき、最初彼はその乳首を拒んでおりましたし、授乳の最中にゲップをしたことなどは極めて‘異常事態 cataclysmic’ともいえますし、それに3回目のゲップの後、彼はついに哺乳瓶の乳首を拒むに至ったのは実に注目に値するといえましょう。

その翌週、チャールズが生後5週間半になったときですが、事実上彼はオツパイからは離乳されております。それでもちょっと申し訳程度に一日に5分は吸わせてもらえたようではありますが…。母親は悲しんでおりました。でも観察者と一緒にリラックスしていろいろと打ち明けたところでは、‘実のなる樹’というのはあまりにたくさん実をつけ過ぎると疲弊するといったことがあるんだそうですし、それに子どもたちが

「誕生、眠り、そして死」といったことについてとてもうるさく知りたがるといったことなども語っております。後に、子どもたちの祖父母、そのどちらも血筋もですが、すべて亡くなっているということも打ち明けられました。親は誰一人いなくて支えてもらえてないわけでありますから、彼女の感情としては、陽射しの溢れた気候のいいところに住む他の親戚たちは気楽そうに暮らしている、それと自分は対照的だといったことなのでありましょう。さて、この一方で、チャールズは初めてといていい或る進歩を見せました。彼は入浴中一度も泣きませんでした。＜子どもたちは、(お湯の中に)落っこちるみたいでお風呂が大嫌いなので…＞ということだったわけですが…。彼はこの年齢の子には珍しいほど背骨がしっかりしています。彼は座っているのが好きで、お腹を下にうつ伏せに寝かせられるとからだごと持ち上げようとします。そして彼が泣き出すのは、目の前に何も見るものがないと退屈してしまうからのようであります。母乳による授乳を振り返って Mrs.C が語っていましたことは、授乳している最中にその周りを他の子どもらがうろちよろして、チャールズがオッパイを吸うのを一緒に見たがるので、ついこちらも慎重にならざるを得なくなり、それでいつも何か緊急の事態に備えて身を強張らせていたということでありました。

さて、チャールズが目覚めてからお風呂に入れられるのに立ち会った観察者は、彼が入浴時をどうにか凌げるようになってきているようだと書き留めております。幾らか動揺しなくはないけれども、‘なんとか必死になって堪(こら)えている’といった趣きなのでした。それに一見して、彼が再び衣服を着せられ終わるや、その身体のギクシャクした感じやら落ち着かない感じも幾分減じるようでありました。

この日の観察で、母親の内に潜在している悲哀感が、‘疲弊した実のなる樹’やら亡くなった両親に触れた彼女の話からも、また母乳を断つことでどこか申し訳なさそうな態度からも、それは彼女の傷つきやすさ(vulnerability)そして心を鎧で固めざるを得ない(wrap herself up)気分繋がっていたわけですが、これまでもなくよりいっそう明瞭に表出されております。彼女にしてみれば、だんだんお乳が出なくなるのを残念がる気分もあり、従って彼が大丈夫、逞しい子どもだということがより重要になるわけです。それで彼について語るのに、その進歩と力強さ strength を強調したのでありましょう。まったくのところ彼は環境に適応しているともいえるわけですし、入浴中に裸んぼうにされてもさほど圧倒されなくなりましたし。けれどもバラバラに崩れ落ちることのないようにと懸命に己れの強く逞しい身体(筋肉)を総動員させる(strong muscular efforts)といったありようは尚も引き続き覗われます。

オッパイの離乳を迎えた翌週以降、彼の強く逞しい背骨 backbone は尚も強化されてゆきました。観察者は、離乳食を与える間中母親が彼から距離を置こうとする apartness 傾向があるのを認めます。恰も他の誰かに代わってもらいたがっているように見えました。それは、授乳を続けられなかったという挫折感を気に病んでおり、それを思い出すのが嫌だったからといえなくもないでしょう。観察者は、その後もチャールズには依然としてからだ(筋肉)に緊張を強いること(muscular tension)で自らを保持せんと懸命になる傾向があるのを認めております。もしくは、ストレスとか何かの変化に遭遇した瞬間に彼は外界対象に身を預け、しがみつくといったことがよくあったのです。それはコットの柵とか、椅子の肘掛け、あるいは間近に目にしたり耳にする何らかの具体的対象物であります。

・アンシア

アンシアは、20代の若いご夫婦の初めての赤ちゃんであります。Mrs.Aは少しばかりボーイッシュな感じのご婦人で、子どもの誕生のごく直前まで働いていたとのこと。赤ちゃんをとて待ち望んでいたのは確かなのですが、どちらかという内心は複雑で、それは彼女の実家が遠く離れていたからです。身近には義理の親たちもいますし、夫の年上の兄弟たちも近隣に住んでおり、いざとなれば助け舟になってくれるはずなのですが…。彼女は自分のことを‘母性的なタイプ’ではないと見做しており、そんなわけで出産にしろ、その後の赤ちゃんの世話にしろ、自分がうまくやれるはずがないとつい尻込みし、万事が途轍もなく厄介なことになりはしないかと大いに気が揉めたようなのでした。

観察者が最初に訪問したのは、母親が産院から戻って数日後のことでありました。アンシアは生後11日目です。しかしながら、この日には赤ん坊をじっくり見ることは出来ませんでした。それというのも、どうやら Mrs.Aが幾らか興奮ぎみにここ最近の出来事をあれもこれもと頻りに観察者に話したがって、それと同時に観察者に赤ちゃんを見せて大丈夫かどうか決めかね、それで思案しているといった印象を得たからであります(この母親は、観察について出産前はまだ同意をしておりません。)

Mrs.Aは、妊娠中に抱いていた不安感を大いに吐露し、出産時の痛みやらも綿々と語ったわけですが、でも取り分け何よりもその経験がユニークであり、赤ちゃんが個性 individuality そのものだったということに驚いたという話に繰り返し戻ってゆくのでした。出産の最中は、<もう二度とゴメンだわ>と内心誓ったのに、もう次の日になると少なくともあと6人ぐらい赤ちゃんを産んでもいいかしらと思ったりしたんだそうです。それほどにわが子となった赤ちゃんに魅せられたというわけなのです。彼女はまた、夫も赤ちゃんに興味を懐き始めたということがびっくりだったそうです。彼女がそれほど赤ちゃんに夢中になるのは不思議ではありません。実際のところ何しろ過去9ヶ月間も一緒だったのですから。しかし、赤ちゃんが男の人にもこんなに速やかに興味を抱かせるということが驚きなのでした。彼女は以前ですと母乳を与えられるかどうか疑わしかったのですが、それも別に難しいことではなく簡単だということが分かりました。赤ちゃんはすぐさま吸い付いたのです。<あの子、どうしたらいいのか知ってたのよ…あの子が私に教えてくれるの。わたしたちにね。全然問題ないの。私はリラックスして、だから今授乳するのを愉しんでいるってわけ…。あの子、万事うまく行きそうだわ。でもそれもちょっとどうかな…。いつもいつも大丈夫ってわけにも行かないでしょうからね>と語ります。それから続けて彼女は、入院中の4日目のこと、出産の高揚感がちょっと途切れて、ちょっと‘気分が沈んだ’ということに触れてゆきます。お腹にトラブルが起きて、それに赤ちゃんは一日中ぐずって落ち着かなかったんだそうです。看護婦たちには随分と助けられたということもあり、とにかくにも赤ちゃんと身近にいられることの満足感は、他にどのような心配ごとがあるにせよ、それを遥かに上回ったということなのです。つまりは、母子共にその狭い部屋の中で互いにどううまく馴染み合っていけばいいのか学んでゆくこと、それだけが大事だったというわけです。

彼女は、赤ちゃんが母親の心の状態に敏感に反応するばかりではなく、びっくりしたことには環境が違ってもそれにも敏感に察知するようだという話を語ります。例えば自宅でごく普通に耳にする音たち、

それは病院内で彼女が耳にしていた騒音とはまるで違ったものであるといった類いのことです。

最初の観察者との面談を通して、かなり多くの過去ならびに現在の不安感に言及されましたが、Mrs.Aが何よりも伝えんとしたところのものとは、まず赤ん坊そのものに大いに驚きかつ魅せられたということであり、そしてこれが真実わが身に起きているということの不思議さに心打たれ、己れの新しい経験そのものについても同様に深く感じ入っている、そうした印象であったといえましょう。

この次の訪問は、アンシアの生後3週間目でありました。ベビーカーに横になり、入浴と食事に備えて待っているところです。母親が近付くと、彼女は彼女を見上げて、足をひょいと蹴り出し、腕を振り回します。彼女はまだ衣服はつけたままです。彼女はからだいっばい背伸びして母親に手を差しのべ、彼女に触ろうとしているように見えました。Mrs.Aは彼女を抱き上げます。わが子に話し掛けながらも、観察者には赤ちゃんが日々成長していること、それに彼女の眼の色が変わってきていることを報告しました。そのようにどちらにも注意を注いでおり、それからアンシアに向かって、ちょっと甘やかすようにして<話し掛けられるのが大好きなのよね>と言います。この間、アンシアは目を大きく見開き、ジッと母親の顔を見つめておりました。

このちょっとした会話のあった後、母親は赤ちゃんをベビーカーへと戻し、入浴の準備をしに部屋を去ります。アンシアは足を伸ばして空を蹴り、手をも振り回します。それは母親が彼女を抱き上げる前に彼女がしていたことです。最初満足げであり、いかにも彼女は何かはまだ触れているといった趣なものでした。数分経った頃、彼女は何かに触れているというよりも、何かを探しているみたいな感じになり、やがて徐々にちょっとだけ足蹴りをしたものの、不安げにあらぬほうに眼をやり、泣き出してしまいます。

母親がやって来て、アンシアに話し掛けますと、彼女はすぐさま泣き止みました。抱き上げられる前にあります。Mrs.Aは彼女を抱き上げ、片腕で彼女を支え、もう片腕で彼女の服を脱がせ、それからお風呂の中に彼女のからだを浸らせます。アンシアは一瞬びっくりした顔をしたものの、大して動じるふうではありません。彼女のからだ全体が母親の腕に寄り添い、その腕の中ですっぽりとおさまっているようでありました。彼女は語りかけます。<それよね。いつもこんなふうでしょ。最初は何か起きるやらさっぱり見当がつかないのね。でもそうなっちゃったらなっただで、悪くないのよね・・>と。アンシアはからだが強張っていて、緊張がほぐれないふうで顔がしかめっ面になっていました。お湯の中へとからだが浸されてゆきますと、母親の腕の中へとっそう擦り寄ろうとしました。やがて彼女は徐々にリラックスしてゆきます。母親が笑い声をあげ、観察者に<ほらほら、ね。可笑しな顔でしょ。ちょっと見て>と穏やかに促します。アンシアがいかにも懇願するふうであり、敢えて解釈するならば、<ねえ、これってどうしてもしなくちゃいけないの？>とその目付きが訴えているのを、母親がそのまま真似して可笑しがったというわけです。赤ちゃんはお湯に浸かりながら母親の腕の中で再びリラックスし始めましたので、Mrs.Aは<ほらねえ、もう大丈夫だわね>と言います。それからお腹を下に向きを変えてやります。すると、アンシアは手足をお湯の中でバタバタ動かし始めます。明らかに喜んでいるふうなのでした。入浴を済ませ、

彼女はあたたかなオイルで体中を擦られて、それから服を着せられました。彼女はご機嫌よくリラックスしています。オッパイを与えられますと、彼女はすぐさまゴクゴクとお乳を飲んでいました。しかし直にうとうとと眠たげになり、そんなふうに母親の腕の中に、この日の観察が終わるまで、ずっと居心地よさそうに寝入っていたのであります。

アンシアが寝入ったようなので、母親は観察者に話を始めます。ここ数日間の出来事について振り返ります。一昨日のこと、アンシアはどうやら腹痛を起こしたみたいで、授乳後に吐くことが続きました。そこで母親は彼女をずうっと腕に抱いたままであやしていたのです。義理の母親の助言では、そうするのは子どもを甘やかすことになるというわけで、子どもは規則的な授乳スケジュールに沿って授乳されなくてはならないと諭されたんだそうですが、それに彼女は敢えて逆らったこととなります。Mrs.Aは、誰にしてもかつての子育てした経験からは随分と月日が経ってもいるわけだから、それがどんなふうだったのかよく覚えているはずもなかろうし、だから赤ちゃんこそが、母親である彼女に他のどんな人よりも何をどうすべきかを教えてくれるはずといった彼女の確信をここで改めて吐露したのであります。彼女は、アンシアの泣き声が明らかにその都度違っていて、それがどういう違いなのかをその都度学んでいるところだと語りました。空腹を意味するとき、苦痛を意味するとき、それから抱っこを求めているとき、いろいろであります。赤ちゃんに規律 discipline を仕込んでゆかねばならないかとも思うのですが、だけどもまだ今はいいと思うわけです。彼女はこれまでを振り返り、何かが絶対的に彼女の中で変わりつつあるということにふと思い当たったと語ります。こんなふうに自分の中に‘母性 motherhood’を見つけられるなんて思いも寄らなかったというわけであります。彼女は、赤ちゃんが眠っているときって何を考えているのかしらと思うのです。夢って見てるのかしら？ Mrs.Aは、アンシアはどうやら夫と自分とは違っていてことが分かるみたいだわと思うのです。なぜならば、夫が彼女を抱えて膝の上に乗せ、高い高いをしたりするとき、それもまた彼女を大いに嬉しがらせるからです。実にさまざまな経験に赤ちゃんは慣れてゆかねばならないってことなのでしょう。Mrs.Aは彼女自身が産まれたときのことを思い出したくはないと語ります。だって、そんなにいい経験だったとは思わないから・・・とのことでした。しかしながら赤ちゃんが物事を考え始めるや、俄然すべてがすごく面白いに違いありません。彼女は、母親であることはとてもハードなことで、前の晩など、もしもアンシアがあのまま夜分ずうっと落ち着かず夜泣きを続けていたならば、どうしたらいいか途方に暮れただろうけど、でもその日はもうくたびれきって二人ともぐっすりと眠りこけてしまい、それから結局7時間もぶっ通しで朝まで寝てしまっていたというわけです。それですから、改めて彼らには互いにどうしたら馴染み合えるかを学ぶためのプライバシーが必要とされるということをつくづく思うということでした。この回の終わり、彼女は観察者に、<いらしてくださいってどうも有難う>と感謝の意を伝え、<いろいろお話しできたことは良かったですわ>との言葉を添えました。

これらの観察からも、Mrs.Aが母親になることは容易なことではないと分かったことはよく窺われますが、そもそも彼女は容易であることなぞ期待してなかったわけです。彼女は自分の能力(resources)に限りがないとは思っておりませんし、赤ちゃんの要求が過剰ならば、彼女は倒れてしまうことだってあえ得ると思うのです。彼女は赤ちゃんに対しての興味で辛うじて自らを維持していられてるのであり、

そして夫が子どもに興味を持ってきていること、それに観察者の関心によっても支えられていると言ってもいいでしょう。そこに集う誰にとっても、これは学びの機会なわけであります。そして彼女はアンシアと同一化できております。すなわち、アンシアが何を感じ、何を考えているのかと不思議がったり、そしてその彼女の眼に外界がどんなふう映っているのかと思いを巡らしたりするわけであります。

アンシアの方も、精一杯に母親に身を寄り添わせようとしていることが伝わってまいります。母親の腕の中(境界のあるスペース)に抱っこされるという経験は、抱っこから下ろされたときにも尚しばらくの間保持されるようであります。彼女はまだ何かに触っている感触を味わっているようでもあり、それからそれを見失い、しかしそれを再び探そうと積極的になるといった感じです。外側もしくは内側のいずれにしろ、それがうまく行かなかった場合には不安感、それに身体統一がバラバラに崩壊するといった内部感覚が生じることになるわけですが、アンシアの場合、どうやらすでに彼女は‘抱える対象(a holding object)’を内側に摂り込み始めており、ですからそれを自分の内側に少しの間なら保持することも可能だということがここに表されてるといえましょう。入浴の場面では、彼女は衣服を脱がされても母親の腕の中ですっかり安心しきっている様子が覗われます。リラックスして母親の腕の中にくつろいで収まっており、そしてそれからお湯に浸かったところで再びからだを強張らせます。しかしそうした新しい環境にあっても、お湯の中で母親の腕の中に抱えられ、そして母親の声の響きを頼りにしながら、もう一度リラックスできたようなのであります。

この1週間後のこと、赤ちゃんが生後1ヶ月目になったとき、観察者が訪ねていきますと、いつもの授乳時間に眠っているのが見られました。Mrs.Aは、アンシアが3時間半ごとの授乳スケジュールにどうやら慣れてきたようだと言います。クリニックの診察では、彼女が年齢からして標準以上の体重があるということでした。彼女の夫がまだ出勤してなくて、それもなにやら Mr.Aに仕事絡みの緊急事態が発生し、それで夫婦間で検討しなくてはならなかったようで、その間観察者はしばらく待たされておりました。彼が出掛けてしまってから Mrs.Aは夫に頼まれた書類を探すのに気が奪われておりました。こうして身の事情やら仕事の煽りで、しばらくの間赤ちゃんを観察者はやむなく背景に追いやられたふうでありました。決して無視されていたわけではなく、ただししばらくは注意を向けられる余裕が母親にはなかったということであります。

ベビーカーの中にいた赤ちゃんがなにやら目覚めた様子で、ぐいと頭を擡げ、悲しげなぐずり声をあげますと、Mrs.Aは彼女を抱き上げ、あやしました。彼らは互いの目を見合っておりました。母親はそろそろ授乳してもいい頃かしらと思ひ、ここは待つまでもないと判断し、早速オッパイを出して赤ちゃんにそれをふくませました。ところがほんのしばらくの間は力強くゴクゴクと吸っていたのですが、赤ちゃんは再びコトンと眠りに落ちてしまいます。母親は、この赤ちゃんの<もう要らない>といった、実にはっきりとした態度に思わず笑ってしまいます。彼女はこの後でも、アンシアが自分の心を知っており、それを表現して伝えるのがとても上手だということをしばしば語っております。彼女は赤ちゃんが再び起きるかどう様子眺めをしておりました。しかしどうやらその気配はなさそうでしたので、Mrs.Aは彼女をベビーカーに

うつ伏せにして寝かせます。そして中断していた探しものに取り掛かったのであります。折々に開かれた扉の向こうから彼女は観察者にお喋りをします。そしてしばらくしてからアンシアはどうしてるかと尋ねました。観察者が、<まだ眠っておりますよ>と応えると、母親は<あら、まあ・・>と驚いた様子でした。そして、<いつもなら大概この時間アンシアは目覚めてベビーカーで遊んでいるのよ>と言います。

赤ちゃんはまだしばらくの間ごく満足げに寝入っておりました。時々彼女は口を動かし、吸ってるような動きを見せました。それから彼女の額の辺りが緊張し始めます。頭を左右へと向きを変えました。彼女の皮膚は青みがかってきて、なにやら緊張で強張ってきました。彼女のからだ全体がしぼんでゆくかのようにでしたが、それから背伸びをし、両脚を蹴りあげました。どうやらその水面下ではとても強烈な感情体験が渦巻いているふうに覗われました。彼女のからだは縮んだり伸びたりを繰り返します。そして背伸びするときには泣くまいとして懸命にこらえているようなのでした。でも結局のところ彼女は泣き出します。それで彼女の中の何かが外へと解放されたかのようです。彼女はそれから脚を蹴りながら、いっそうのこと声を荒げます。そして下肢を突き出し、より強くバタバタと揺ります。この後すぐに彼女はおとなしくなって、再び寝入ってしまいます。もう一度手と口がモゴモゴと動き出し、開いたり閉じたり、吸う動きをしておりました。引き続き、彼女の額は再び緊張が走り、青ざめてゆきます。そして、これら全体のプロセスが繰り返されました。これは観察者がお暇をするまでにさらに2度ほど起こりましたが、やがてアンシアは穏やかな眠りへと落ちたようでありました。

この観察から、赤ちゃんの眠りの中でどうやら複雑な葛藤が生じているらしいことが覗われます。母親にごく短い間抱っこされそして授乳してもらった後、彼女はリラックスして眠りに落ちたわけですが、彼女の口の吸う動きはまだオッパイをもらっているつもりでいるといった空想を示唆しております。しかしながらこの良い経験を長くは保持できずにいるようです。なにやら‘厭な考え nasty thought’が割り込んできて、彼女をおののかせ、まるでそれに飲み込まれてしまったかのようであります。それでそれを外へ排出せんと躍起になっていて、辛うじてそう出来たときにはどうやら解き放たれ自由を覚えるようであります。このプロセスは幾度となく繰り返されたわけですが、そこにはアンシアのコンティンする能力が、そして迫害 persecution に立ち向かう能力にしても並々ならぬものがあることが示唆されているといえましょう。すなわち、彼女は内的な‘オッパイ’を摂り込んでおり、それがなかなか頼み甲斐があるといひましょうか、アンシアがなんとか自らを抱えられるように、また悪いもの、腸内ガスといったものは排除してしまえるようにと大いに力を貸してくれているということなのであります。

さて、この数週間後の観察記録にここで触れてみましょう。この時、アンシアは生後2ヶ月半になっておまして、両親と一緒に休暇を過ごしに出掛けていたわけですが、帰宅しましたとき、彼女は腹痛を起こしております。しつこくゲップもあり、泣き声が全然止みません。彼女は眠ってゆくようでしたが、顔が赤らんで強張り、からだを、特に頭と肩とを頻りに落ち着かなげに動かしておりました。こうした様子から‘どこかしらが捕えられた caught somewhere’感じているらしいとの印象が伝わります。それでなんとか脱け出そうと躍起となり、それで頭が突き出て、からだ全体を牽引するような動きをしていたこ

とになります。彼女は、その動きを止めます。それも明らかにたびれ果てたから小休止といった感じで、それからひとまずリラックスし、しばらくは穏やかに寝入っております。それからまた同じことが繰り返されていくのでした。このプロセスは、とても意味ありげで強烈な印象を与えたものの、そうした発作が起きている間は母親も観察者もその場にただ立ち尽くし、為す術もなしに黙って見守っていることしか出来ずにおりました。こうしたシーケンスが少なくとも3回繰り返された後、彼女はどうかしばらくの間やすらかな眠りに落ちたようなのです。

この後に母親は、休暇中に会ったアンシアと同年齢の他の赤ちゃんのことを話題にしました。アンシアとその子との間には幾つか類似性があったんだそうです。その一つというのが、その子はアンシアみたいに、すっかり寝入ってしまうまで母親のオッパイに深く頭をもぐりこませるようにしていたということでした。アンシアがそれでどうして呼吸困難にならないのかしら、と時折彼女は訝ることがあるんだそうです。それから母親は、休暇中に実にたくさんの変化に遭遇したわけだから、アンシアにとってそれらをすべて呑み込むには時間が掛かるだろうと思うということを語っておりました。

この一方で、赤ちゃんはぐったりして、すっかり疲労困憊した様子で寝入っておりました。彼女のからはじっと身動きせず、彼女の眼は少しだけ動いているようです。瞼はいくらか閉じかけていましたけれども…。母親は、アンシアが何を考えているやら、どんなイメージを心に懐いているものやらと考えてみるのです。そして、きっと夢を見ているに違いないわと思うのでした。

しばらくするとアンシアは再び目を覚まします。口で何かを探す動きを始めました。まずなんとかして右手の親指を口に咥えようとします。それから今度は手を口の方へと運ぼうとしました。でも、それは難しかったようです。彼女は握りこぶしを口へと持ってゆこうとしたのですが、袖口が邪魔してうまくいきません。それでとにかく何か手に掴めるものを探そうと試みます。右手の握りこぶしがどうにも袖の中に引っ込んだままで出てきてくれません。ぜひにもそれを探そうと必死に何度も何度も試みるのでした。一方で彼女の左手はそのまま脇にあって、時折ほんの少し身動きするだけなのであります。アンシアはそれからほんとうに動揺を来たし始めました。一見して分かるのは、右手の親指を見つけられず、それで大いに焦れてるということでした。彼女の不快感は募ってゆき、やがて彼女は泣き声をあげます。ところが直に今度は左手の親指が口へと‘やって来ます’。彼女はそれに力強く吸いつき、ご機嫌そうな顔色を浮かべ、くつろいでゆきます。母親は、彼女が指吸をし始めたのは1週間前からだと語りました。

しかしながらアンシアは口の中に親指を長くは咥えていることが出来ません。それで、母親の方に顔を向け、アテンションを求めます。Ms.Aは彼女のオムツを替えてやり、膝の上に座らせます。アンシアはオッパイの方に目を向け、それにもたれかかり、口を開けます。母親がそれを出してやると、赤ちゃんはしばらくの間ゴクゴクと力強く飲んでおりました。完全にそれに没頭しています。この授乳の間、彼らは互いに眼を見遣っておりました。その一方で母親は赤ちゃんにやさしげに語りかけもしております。アンシアは母親のオッパイを飲み終わった後、膝の上に座ったまま辺りの物にどうやら気が奪われ始めます。

機敏な目付きで一つずつ部屋にあるものを熱心に眺めてゆきます。それら対象物にからだをのめり込まずに注視しています。異なる物たちに次々とその眼差しを移しながら、彼女は母親の膝の上に居心地よげに座って落ち着いていました。

この観察から、赤ちゃんの眠っている間の落ち着かなさが‘どこかしらが捕えられた感じ’といった印象であったのを、アンシアが眠りに就く前にまるでオッパイに埋没させんばかりにからだを摺り寄せると語った母親の話に繋げまして総括しますと、そこにはオッパイに強烈に投影された‘閉所恐怖症的不安 claustrophobic anxieties’が見て取れましょう。これは、前日彼女が体調を崩したこと upset に関連していたのかもしれませんが、休暇のため環境やら生活のリズムが変わったことにも関連があったと言えます。この赤ちゃんは‘良き内的対象’を探すこと、もしくは再現させんとすることに確かな能力を示し続けているように見受けられます。そうした良き内的対象にはいろいろ違った性質のものが考えられますが、先ず何よりも最初に「抱えること the holding」をあげていいでしょう。頭の上に置かれた手 (the hand on the head) は、赤ちゃんの心身を一に安らかとし (keep the baby's person together)、その一方で悪いもの (腸内ガス) を排出させるといった母親の機能を再現するものと考えられましょう。それから、「空っぽ the emptiness」を充たす」といった性質であります。親指は乳首を想起させるものともいえましょうし、興味深いことに、切迫した事態に陥ったその瞬間には向こうから助けに‘やって来てくれる coming’と分かっているかのようでありまして、それは恰も赤ちゃん自身の意識的コントロールに先駆けての内在化された対象の‘代理人 agent’といったことでありそうです。やがて徐々にアンシアは母親に外的対象として向き合い、そしてオッパイを与えられたときには熱心にお乳を飲むわけなのですが、母親を口、眼、そして耳で振り込むといった経験は強化され、尚いっそうに母親の周辺のより広い世界を振り込んでゆくことに彼女は気を奪われてゆきます。それも一つずつです。アンシアがオッパイを飲むのと同じように精一杯心を込め、いつもの熱情的なまなざしでもって…。

この1週間後、アンシアが眠っている間にもう一度観察が行われたわけなのですが、それは彼女の授乳のほんの少し後のこととして、彼女はほんの少しの間ではありましたが、上記したような発作を起こしています。だがこの時には、彼女の握りこぶしは口へと容易に啜えられました。そしてその右手の親指を吸っている間、彼女は左手を右手に寄り添わせ、支えるかのようになっています。実に余裕たっぷりといった感じなのでした。そしてすぐその後に指吸は止まり、彼女は寝入ったわけですが、両手はリラックスし、親指はゆるやかに口から外れていったのであります。

■ 或る若い母親の分析のノートから；

Mrs.Gは、大学院の学生でありまして、産科医からの紹介で分析を受けに訪れました。さまざまな心気症的な兆候があり、それに彼女の妊娠期間に外来クリニックの医師及び看護師らに対して神経過敏な、いくらか迫害的ともいえる態度が見られたからであります。男の子の赤ちゃんを出産し、その数週間後に分析は開始されました。

当初彼女はちょっと派手な、あまり取り合わせがいいともいえない色合いの‘芝居がかった’装いでやってきました。それは見るからに彼女の‘内なる荒廃’の雰囲気露呈していたわけですが・・・ところが最初の週の分析以降、このどこかけばけばしい外見は徐々に影を潜め、今度はくすんだ色合いのスカートを履いてくるようになります。それもそのまま彼女の心の状態を反映したものといえましょう。

彼女は何をどう話したらいいのか困難を覚えるふうでしたが、それから徐々に病院の医者たちに対しての彼女の常軌を逸した行動について、言葉をつかえながら恥じ入った面持ちで説明してゆきます。それを喋り散らかしながら、分析治療を始めるにあたり<一体なんで私が・・・>といった再三頭を擡げたところの疑念をも表出させていました。なぜならば、分析はひとの創造性を損なうといったことや、一旦始めると分析家は決してやめさせてくれないということは誰でも知っていることだし、将来を嘱望されている若い作家としての彼女にしてみれば、心をあれこれ他の誰かにいじられるなぞゴメンだということになります。どんな医者だろうと、彼女の頭の中で何が起きているのかを当人が知る以上に語れるなんてことがあり得るだろうか？ここで解釈が試みられました。彼女の医者たちに対しての疑念を分析家へのそれに密に関連付けたところで、彼女が‘赤ちゃん’、すなわち彼女の‘心の内容物’が損われるもしくは盗まれたりするのを恐れているということが指摘されました。そのせいでしょうか、彼女はその次のセッションでは二人の医師についての彼女の本音をよりいっそう開けっ広げに語り出しました。まずコンサルタントに対しての彼女の憤り、それは彼が傲慢で、自己主張が強く、偉そうな態度だということにありました。それから研修医に対してどうにも我慢がならないのは、彼がいとも簡単に不安に陥り、不決断となり、彼女の質問にまともに答えられないといったことでもあります。この若い医者の方は、彼女の弟を想起させました。子どもの頃に彼をひどく苛めたものだから、彼は今でも学習困難に陥り、だから分析を必要としているのは彼女よりもむしろ彼の方だということなわけです。

これは、その後も繰り返し再現する‘転移’の難しい局面を物語る最初であったともいえましょう。もしも分析家が有能とされ、それで彼女の心の状態について何かしら有益なことを語れるとしても、それはすぐさま彼女の中に競争心を惹起させるでしょうし、またその人が偉そうな態度をしないかどうかの不安感が頭をもたげますと、たとえどんなに専門的技術を有しているとしても用の無い人になってしまうわけなのです。片やもしも分析家が彼女に対して的の得た理解やら十分な指摘をもできないとしたら、それはそれで実に優柔不断で頼るに値しないものにされてしまうわけで、つまりは‘乳首を失ったオッパイ’もしくは塵芥(ゴミ)のように扱われた軟弱な弟ということになりましょう。そしてその都度、彼女は線香花火のような勝利感を味わうことはあっても、結局のところ何もかもが元の木阿弥となり、そうした堂々巡りを繰り返す羽目に陥るのであります。

最初の数週間、大いなる逡巡と迫害的な感情にも関わらず、彼女は分析のセッションに毎回実にきちようめに定刻に訪れております。彼女が言うには、もしも遅刻したとしてもそれは彼女のせいではなく夫のせいだということでした。つまり彼女の言わんとすることは、彼が仕事を理由にだらだらと会社に居座って帰宅が遅れ、それで当然しなくてはならない赤ちゃんの世話を出来ないといった事情でも

ない限り、彼女が分析のセッションに遅刻することなどあり得ないというわけでありませぬ。それから徐々に、隙あらばいつでも彼女を貶めんと身構えている‘勝利者としての男性’の異なったバージョンが次々に登場してまいります。産後の検査に立ち会った医師ですが、彼は彼女が赤ちゃんを母乳で育てるなぞ出来るはずないと天から信用しなかつたわけで、それでいかにもいづれ母子共に見事しくじるに違いないといった態度であつたということでありませぬ。それに彼女自身の父親ですが、彼女とは随分疎遠になっておりませぬ、母親が2、3年前病床に臥していた折、彼は彼女に思い遣りなどこれっぽちも見せなかつたということでありませぬ(彼女の母親は乳癌で死んでおりませぬ)。

これら最初の頃のセッションでは赤ちゃんへの言及は殆ど見られませぬ。彼女の中の‘恨みがましい、欲しがりやの子ども’が目一杯にその分析時間中寝椅子を占拠していたということになりませぬ。時間と注目という点で自分が与えられて然るべきものはガッチリ貰わなくてはといつたところでありませぬ。それで週末やらセッションが途切れるときなどは大いに迫害感を覚えませぬし、分析家が言うところのものを熱心に把握しようとしながらも幾分疑わしうでもあり、それというのは彼女が‘(分析に)病みつきになる(hooked)’ことを大いに恐れていたからでありませぬ。かくして‘内なる対象 internal object’に投影された分析家なるものが徹底操作されていつたのでありませぬ。時には物凄う‘欲しがりや needy’であつたり(剥奪された赤ちゃんの弟)、時には飽く事を知らぬほどに強欲であり、かつ迫害的でもあつたり(癌化された乳房)、さらには彼女自身の自分こそが赤ちゃんの母親であるといった感情を邪魔立てする、そうした対象としてさまざまにそれらは了解されていつました。そこからの結実が、分析開始5週間後にして初めて彼女から語られた夢でありませぬ。隠しようもない恐怖を伴いながらも、それも彼女の創造力を示す、‘内なるいのち inner life’のサインでもあるとして、安堵で迎えられることになりませぬ。

その夢とは2人の赤ちゃんについてでありませぬ。一人は健康で丸々と太つており、もう一人の方はちっぽけで飢えており、覇気がなく、いかにも死に掛けておりませぬ。そのどちらかが彼女であり、もしくは全然そのどちらでもないようでありませぬ。健康そんな赤ちゃんは、事実彼女自身の息子にも見えます。また彼女の弟の幼少時の頃の写真にも似ておりませぬ。とても可愛らしい性格でありませぬし、よく微笑し、誰からも愛されておりましたから、彼女にしてみれば燃えるような嫉妬心を掻き立てられたのでありませぬ。それから、そのちっぽけで飢えそんな方の赤ちゃんについて連想を尋ねられたとき、彼女は内心の動揺を隠せない低い声で、子どもにオツパイを与えることを諦めざるをえないことになるのではと恐れていると呟きます。彼女はずうとお乳が充分ではありませぬでした。最初の数週間以来、ずうとお乳の他にミルクで補われていつたのです。それも近頃ではだんだんお乳の出が少なくなつていつたのです。彼女の夫は、彼女が赤ちゃんの離乳をそろそろ願つていつたのじゃないか、哺乳瓶にいつそ替えてしまえば分析セッションの間気兼ねなく家を留守にできるわけだからと言つたんだとか。赤ちゃんの授乳は欲しいときに与えられることになりませぬでしたが(demand-fed)、いつも規則的に欲しがるというわけではありませぬ。

彼女の赤ちゃんがもしも‘母親の赤ん坊 mother’s baby’、すなわち彼女の幼い弟として経験されている限り、それは乳房(もしくは分析)を巡つて彼女と張り合う相手として感じられているということでありませぬ。

あり、彼女は己れの貪欲さ greed ゆえに、そうした競争相手の彼を犠牲にしてまでも己れの取り分に執着していると思ひ至り、それで動揺したのであります。彼女はすでに、自分が分析家の唯一の患者であるという確信を述べております。万能感的に他の子どもたち(分析患者)をすべて‘死滅’させていたわけであり、こうしたことから、分析治療を始めた当初彼女がなぜ期待など何もありませんといった‘覇気のない赤ちゃん’みたいであり、まるで中身が空っぽ、いかにもこれといった考えなど持ち合わせませんといったふうだったのか、ここで合点されましょう。だが、そうした‘覇気のない赤ちゃん’はごく簡単に‘強欲で飽くことを知らない癌ともいべき赤ちゃん cancer baby’になって、乳房をどんどん食い尽くし占拠せんとするわけなのであります。彼女の身に引き戻しますと、そうした‘夢魔 the incubus’を心の内に抱えていて、それが彼女の赤ちゃんに必要なミルクのすべてを飲み干してしまうといった脅威に晒されていることになりましょう。だとしたら彼は、健康な子どもから、ちっぽけで取るに足りない、死にそうな幼子となるほかないのであります。これらの解釈が語られている間、彼女はそれを考え深げに聴いており、心に深く留めたふうでありました。この翌日のセッション、それは月曜日でしたが、彼女は腕が痛いと訴えます。赤ちゃんをずうっと抱っこして、それでそうなったと関連づけます。また、それを母親の死ぬ前癌の二次的な疾病として首やら腕の辺りに出来た痛みとも関係づけました。その当時は単なる関節炎だと偽りの診断を聞かされていたとのことですが。夢の中の死にそうな赤ちゃん、そして死にそうな母親、そして癌的ともいえる飽くことのない貪欲さでもって食い散らかされる内なる乳房、それらの間に今や実に成る程といった、大いに納得できる関係づけが出来たことで、初めて彼女はともども無い涙を流したのであります。それは絶望の涙でもあり、また赤ちゃんへの愛の涙でもありました。それに、彼女自身は9ヶ月も母乳を貰っていたというのに、わが子にはそれがどうして出来ないのかと自分を責める涙でもありました。それはまた彼女の内に引き継がれた遺産 heritage ともいべきもの、すなわち乳房によって与えられた‘良きもの goodness’、それを大事にし、次の誰かに手渡すことが自分には出来ないといった深い悲嘆とも受け取られたのです。すでに一つ彼女が言明していたことがあります。分析家から貰う時間こそが今の彼女にとって唯一良いものであり、だからこそ彼女自身分析を終了させることも許されず、延々と続けなくてはならず、やがては分析家に骨抜きにされるのではないかと恐れているということでした。すなわち、それはパラサイトの相互に衰弱させ合うといった関係性を言っているのでしょう。彼女の悲哀感はずうっとその週の間続きましたから、分析家はどうやら彼女のお乳は干上がってしまい、赤ちゃんは哺乳瓶に切り替えられたものと考えていました。

それから翌週の月曜日、セッションの始まって間もなくの頃、彼女は突如初めて暖炉の上の円筒状の花瓶を認めました。事実それはいつもそこにあり、生花が活けてあったわけなのですが。そしてそれが彼女の友人でもある或る陶芸家の作品に違いないと思ひ込みます。それから引き続き、分析家は自らお店でこの品を買い求めたのではなく、その彼女の友人とは懇意で、直接彼からその陶器を貰ったのではないかという疑惑を懐きます。それから尚も、その或る友人の話になり、それはかなり長々しい攻撃的な演説ともいえるものでしたが、彼は彼女がここで分析を受けていることを知っていて、それにおそらく分析家は彼女の友人の誰をもすべて知っているのではないか、だとしたら誰も彼女にとって自分だけのものと呼べるものなど無いではないか、といった疑念を懐きます。こうした感情の噴出に絡ん

で、彼女がいかにも週末における‘両親の性交’の証拠を見たといわんばかりで、すなわち‘父親ペニス’が‘母親(花瓶)’を新たな精力で満たし、‘お花の赤ちゃん’を与えたといったことなのですが、それで大いに動揺し慌てふためいたのだらう、との指摘がなされました。こうした解釈の試みは、彼女が抱いていた母親への熱烈な愛着、そして‘暴君的な侵入者’としての父親に対する再燃化された怒りに関連づけられるところの多くのディテールをさらに誘い出したといえましょう。後に分析家は、花瓶についての彼女の攻撃的な長広舌に関連づけ、それが母親としての分析家に向けられた羨望の表出として掘り下げてゆきました。尚も‘授乳し続ける母親’としての分析家に対して、つまりは彼女のオツパイが干上がってしまったことでより強烈に強調されたところの羨望であろうと解釈したわけであります。すると、患者はごくあっけらかんとく奇妙にもお乳がまた出るようになりましたのよ。今では以前にも増してふんだんにお乳が出てるんですの>と語ったのであります。事実それから彼女は、赤ちゃんを尚も8ヶ月間母乳を与え続けたということになります。

■総括

アンシアそしてチャールズを振り返りますと、どちらもがとてもよく世話されている赤ちゃんといえましょう。いずれもが母親と或る意味とてもいい経験を持っていますし、母親のどちらもわが子を喜び、とてもいとおしんでおります。Mrs.Cは、育児は初めてではありませんから、上の子どもらが赤ちゃんの頃一緒だったときの良き思い出やら辛い思い出やらいろいろと持っております。そして(この論文で記載されました観察のシークエンスの中には含まれておりませんけれども)、それら子どもたちの成長するさまを生き生きと興味を持って見守る喜びもありました。

Mrs.Aについて申しますと、すべてが初めてのことなわけですが、興味と発見する喜びの感覚が赤ちゃん誕生以前に内心懐いていたところの懸念をはるかに上回っております。彼女には赤ちゃんに対して反応する能力 the capacity to respond、そして自ら赤ちゃんから学ぼうとする能力が秀でてるように見受けられます。実際のところ赤ちゃんは自らのニーズをはっきりと表出する事ができましたし、それが充たされた場合には満足を示したわけです。このことが Mrs.Aをして、自分はほんとうに母親なのだという自信を募らせていったといえましょう。つまり、もはや小さな女の子ではない、だから育児について経験ずみで何でも知っている親達の指示やら批判にいちいち振り回されることなぞ要らないといったわけでありました。どんなふうにな彼女自身が変わってきたかを認めることの嬉しさは、赤ちゃんが成長してゆくさまを認めることの喜びと同時並行しております。彼女は赤ちゃんがどんなふうに感じていて、どんなことを考えているのかとふと試みているのです。すなわちこれこそが母性の《夢想 reverie》になります。この母子間の交流は親密でかつ深いものといえましょう。こうしてアンシアは、経験から学ぶことのできる対象を握り込んでいったと思われまふ。しかしながら、ここでもしも Mrs.Aの最初の子どもが基本的にどちらかというと喜ばしてあげることの難しい子どもであった場合、彼女にとっての母性 motherhood の経験とは実際いかなるものであったらうかと、いろいろ推測を試みるわけでありまふ。彼女は明らかに精神的な弾力性 resilience そして感受性 receptivity の備わった若い女性ではありませんけれど、あともう少し余計に要求されると無理だと感じて引いてしまう瞬間がありそうです。

チャールズは、生後3週間目において、リラックスするのがさほど容易ではありません。コンティンされているようにも感じられず、からだは皮膚の内側にうまく収まりよく収まっているふうでもなく、どうやら‘ばらけてしまう fly apart’といった傾きが覗われます。それはアンシアと同じ年齢であったときに比べてみてもそのようであります。外側の感覚的刺戟、例えば光だったり、時計のチックタックの音だったり、モノに触れた手応えだったりですが、そうしたものに魅せられていたり、直接その影響下にあって抱えられている場合には、どちらかと言うとからだはより自己統一 integrated されているように見えます。ところがそれらが除けられてしまうと、自己統一がたちまち崩れてしまう disintegrated ようなのであります。これは殊に、彼がレギンスを脱がされたときに顕著であります。両足をサイクリング風にバタバタさせるやら、真っ赤になって怒るやら、筋肉は強張り、そして著しく逞しい背骨など、これらすべては後に彼自身が己れを自己統一させる上で役立つものであり、‘二次的皮膚 second-skin’ 構成かと思われれます。

彼はコットの中へまるっきり潜り込むようにするのがよく観察されておりますが、母親に対してはそうしたことはありません。そこからどうやら彼は母親の傷つきやすさ vulnerability に対して幾らか感ずるところがあったのではと総括してもいいでしょう。彼女は観察者に、母乳を与えることが楽ではなかった、結構苦勞だったということを語っておりますわけで。彼女の衣服に身を包まれることへのこだわりは、チャールズの服を着せられると安心するのと並行しております。これら衣服は、この家庭内に醸(かも)される活気やらさまざまな家族ぐるみの取り組みもですが、Mrs.Cにとっては悲哀感やら内なる喪失といった彼女の感情から自らを隔離させる‘覆い cover’として用いられているようであります。最初の頃にチャラッとのめかされ、それから後に林檎の木があまりにたくさん実をつけると疲弊するといった、つまり死んだ親のことに触れていますけれど、そこに間接的に表出されているのがお分かりでしょう。

Mrs.G の症例は、心気症的病い及び迫害的な抑うつ感によって母性のコンティンメントが病理的に支障を来たしたものと考えていいでしょう。その母性的機能は、彼女の‘死んでいる内的母親 a dead internal mother’ 一癌化した乳房一との投影同一視によって躓いてしまっているといったことのようにあります。彼女の医学的検査に直面した折に彼女が感じた迫害感、その後の分析的探索の後においてもそうですが、この破壊された、そしてまた破壊せんとするところの‘内的対象’にではなく、むしろ赤ちゃんをコンティンできるかどうかの自らの能力について彼女が抱く執拗なばかりの疑念に関係づけられていたといえましょう。

最初の頃に分析治療に現れた彼女が身に付けていた派手派手しい色調の服は、彼女を自己統一させる機能を発揮していたともいえますし、またそうした内なる荒廃を覆い隠す試みであったようにも見受けられます。彼女は、分析家の許に紹介され治療に通うようになって後、どうやら母親としての機能を取り戻したようであります。彼女は分析状況というコンティンメントの中で、幼かった頃の嫉妬心やら貪欲さといったものを幾らか経験し始めたのであります。彼女は、母親が他の赤ちゃんを持つことに我慢できず、それで産まれてきた弟を忌み嫌ったということなのでしょう。そうしたことなどあれこれ改めてじっくりと思い出すことができたというわけであります。

それぞれの母親は、赤ちゃんの誕生後自らの内に蘇った幼少時の感情を処理しなければなりません。その赤ちゃんとは、幾らか深い意味では‘母親の赤ちゃん mother’s baby’として経験されているわけなのであります。妊娠そして母親であることにどのような心の躓きもたらされるかについて幾つかの推論ができれば、Mrs.Cの症例はそれらを幾らか例証しているものと考えられます。そこでは赤ちゃんを儲ける親に対して、そして乳離れを強いるオッパイに対して、覆い隠され、深く心に埋め込まれていた恨みの感情が改めて湧きあがったといえましょう。それらの感情はそれほど苛烈で未解決であるがために、母性的な‘夢想する’能力を浸蝕しかつ麻痺させかねないのであります。

Mrs.Cは、幾らかその程度は弱いとしても、内的に支えられていないと感じる状態に気を奪われていたといえましょう。それで彼女は自らを防御せざるを得ないことになり、それでチャールズの最初の頃、どうやら彼に情緒的に寄り添うことが妨げられていた嫌いがあったものといえましょう。Mrs.Aは、不安感について考えることも、それについて語ることもさほど臆するふうではありません。彼女自身が内に抱いていた憂慮からアンシアそしてその内なる世界へと興味をシフトすることがどちらかというより容易であったように覗われます。チャールズは、生後間もないこの時期、生き残り survival にひたすら気を奪われていたといえましょう。勿論そうでなければならなかったわけですが、バラバラに崩壊しないように自らの身を守らんと躍起でありました。アンシアはこれと年齢的には同じ時期ではありましたが、彼女の苦痛をコンティンしてくれる信頼できる母親的対象 maternal object を内側に摂り込んだといったふうでして、観察からそうした証拠 evidence が覗われます。そして周囲のものに機敏に関心を向けながらも、彼女はもはやそれらのものにまるっきり依存しているとは言えないようです。（訳； 2015/05/30）

※参考文献；

Klien,M.(1921). The development of a child.

International Journal of Psychoanalysis,4:419-74.

Bion,W.R.(1962). Learning from Experience. London:Heinemann.

Bick,Esther.(1968). The experience of the skin in early object relations.

International Journal of Psychoanalysis, 49:484-86

Meltzer,D.et all .(1975). Explorations in Autism.Pertjsire: Clunie Press.

※原典； Some notes on maternal containment

in ‘good enough’ mothering

by Martha Harris

Journal of Child Psychotherapy(1975) vol. 4(1), pp. 35-51

【訳者あとがき】 ～《the experience of togetherness》をめぐって～

山上 千鶴子

今回マーサ・ハリスの論文とアン・アルバレズ（An Alvarez）の論文の翻訳を2つ同時にアップロードしたのは訳がある。いつだったか、このマーサ・ハリスの論文の翻訳を試みた。が、どうにも言わんとする骨子が掴みづらい。バラけた感じで筋立てがすっきりしない。一見して纏れた糸のかたまりのようで、これっという糸口が見つからない。もどかしいのだ。それで致し方なく、その翻訳した下書きをしばらく寝かせたままにしてあった。何ヶ月も…。そこにたまたまアン・アルバレズ（An Alvarez）の論文が目にとまった。マーサ・ハリスを追悼しかつての【タヴィストック】の面々が寄稿なさり、娘のMeg William Harrisによって編纂された論文集の中の一つである。そして、「マーサ・ハリスを読む」コツを教えられた。アルバレズは、マーサ・ハリスの著わした文章を目で辿るには、「筋立て」に縛れることを敢えて意図的に断念するように勧めている。マーサ・ハリスが興味の赴くままにあっちこっちへブラブラと「寄り道」する後に付き従い、一緒になってこちらも大いに面白くなってじっくりと付き合うのがよろしいのだと言っている。ああ、なるほどと感服した。お蔭で、私もまたマーサ・ハリスの自由闊達な連想のふくらみに寄り添いながら、その息吹を感じ、それに呼応して自分の連想を紡ぐことが無理なくできた。実に有り難かった。

さてここで、アン・アルバレズ（An Alvarez）のせつかくのご忠告に逆らうようだが、私は敢えてこの論文のタイトルとは別に一つの「隠れた主要テーマ」を語りたい。アルバレズは、マーサ・ハリスへの個人的親しみそして懐かしさを吐露しながら、彼女を回想するにあたり、その多くの著作物の中でも取り分けこの論文を引き合いに出して縷々語り、かつ「this extraordinarily rich paper」として最上級の賛辞を惜しまない。そこには何かしら格別な深い意味があるに違いないだろう。この彼女の論文が突出して秀逸であるのは紛れもないこととして、おそらくここにはマーサ・ハリスという人の「真骨頂」がもっともよく現れているからに外ならない。そう私は思った。それが何かといえば、彼女という人に身近に接し、その薫陶を受けた人ならば誰でもが記憶しているであろうこと、すなわち彼女に備わった「the experience of togetherness（一緒であるという経験）」の感覚である。マーサ・ハリスという存在が奏でるところの主旋律とは実に「togetherness（一緒であること）」といってもいい。この彼女の論文はその響きを縦横に漂わせている。これを【訳者あとがき】の見出しに掲げた所以でもある。アルバレズもおそらく異論はないはず。【タヴィストック】が多くの優れた逸材を輩出したとしても、この意味で彼女は極めて稀有な人であり、「異色」の存在ではなかったかと思う。英国精神分析のエスタブリッシュメント（Establishment）（すなわち権威筋の主流派）からの評価はどうやらそれほど高くなさそうだ。理論上の際立った貢献というところからしか彼らは見ようとしなから、それで彼女はいくらか他に見劣りするといった印象なのだろう。ここに些かアルバレズ（An Alvarez）の苛立ちが覗えなくもない。マーサ・ハリスの早すぎた逝去がひとしお惜しまれる。

そもそもこれら「togetherness」やら「the experience of togetherness」といった聞き慣れない言葉を最初に私が目にしたのは、彼女の論文『タヴィストック・トレーニング及びフィロソフィー』（1977）の中であった。（p.10）〔註：山上訳出〕いかにもさりげなく語られていて、平易な言葉だからおそらく軽く見過ごされてしまう。それらが他の彼女の論文にもあるのやら、ついぞ私は知らない。そこではサイコ・セラ

ピストのトレーニングに絡んでの話であったのだが、要約するに、「the experience of togetherness」こそが、子どもの成長を促す大きな主要ファクターであり、つまりは‘糧’であり、また‘土壌’でもあるということ。それが心の内側に取り込まれ、しっかりと根を張ってゆくことが、やがて無理なくその子が一人立ちをし、他者への愛情と信頼感を失わず、尚も‘個人 person であること’に耐えられる、と彼女は語っている！われわれサイコセラピスト・精神分析家のめざすものとは、患者が内的にしる外的にしる「一緒 togetherness」という経験からはぐれている状態から、そこへ再び立ち還ってゆけるように心に弾みを付けてやることであり、従って、われわれの基本的姿勢として「the experience of togetherness」の感覚は大いに涵養されねばならないといったことが示唆されている。痛く感じ入った。究極には、この「the experience of togetherness」はひとのいのちがやすらうということ(安心)、つまりは‘魂の救済’といった核心を鋭く突いていると思われる。まさに宗教的エッセンスといえなくもない。マーサ・ハリスの素朴な信条が覗われる。それを深遠な哲理といえば、人は首を傾げるだろうか。

話が前後するが、ここで思い出されることが一つある。【タヴィストック】でのこと、トレーニング・ケースだった私の症例ハンナは、セラピーの終盤に、こんなことを私に語った。それは夏季休暇から戻ったセッションで、<このお休みの間、‘迷子’にならなかったかしら？>と訊かれたとき、彼女は<全然！>と応えてくたって、自分のこと、あなたと一緒にのひとだってこと知ってるもの(I know I'm a person with you! ..)と言ったのだ。これである！私は彼女がどんなに誇らしかったか。そして私もまた、サイコセラピストとして‘勲章’をもらったに等しい。これに比べれば、【タヴィストック】修了後、【British Association of Child Psychotherapists】の正会員に認定されることなど何の意味もない。私の中の心理臨床家としての樂觀のルーツはここにあると言える。私はつい最近までこれらマーサ・ハリスの論文を読んでいなかったに違いない。「the experience of togetherness」にはまるで聞き覚えがない。だが、この<I'm with you>がどれほど肝心要なのかを私は知っていた。それこそが【タヴィストック】であり、「マーサ・ハリス」なのだという理解が私なりに無意識裡にあったといえよう。不思議な因縁としかいいようがない。

この論文を読むだけでも、分析臨床の場での彼女、スーパービジョンをとおして乳児観察に立ち会う彼女、それがどのような経験しろ、彼女が相対する他者に対しての‘togetherness(一緒にいる)’が伝わってくる。言い換えるならば、<I am with you!(私はあなたと一緒によ)>がある！この論文を読みながら、誰もがそうした<I am with you!>の輪の中に知らずに招かれてゆく。そしてそれと気づかずに、「the experience of togetherness」の感覚がジンジンと心に浸透してくるようにも思える。実感できるわけだ。この感覚は、書物を通して精神分析を学ぼうとする人たちには普通なかなか感得されることはなからう。盲点と言ってもいい。経験を置き去りにして、知的理解だけでは《精神分析》の精神は枯渇する。その伝統が尚も廃れず、生き永らえることがあるとしたら、ここで墨守せんとするものとは、この「the experience of togetherness」の感覚でしかないのではなからうか。誰かのまなざしに触れたということ。そしてそれがとても役に立った(helpful)という気持ちの高揚。それこそが期待される。どうやら聞くところによると、現況の【日本精神分析学会】においていよいよ‘経験重視’へ

と舵が取られてゆくらしい。遅蒔きながらも、「パーソナル・アナリシス」が導入されてゆく運びらしい。この‘togetherness’の感覚を、つまりは人と人との出会いの中で、皮膚感覚でコンティンする・コンティンされるのが共に分かち合われることは必至となろう。われわれの夢見る未来が拓かれてゆく。

もう一つここで打ち明けることがある。このマーサ・ハリスの論文の翻訳が一時頓挫した理由は他にもあった。アン・アルバレスはマーサ・ハリスの論文を読むには、一つ一つ細かいところによく目を凝らさないと、そこに嵌めこまれているともいえる、彼女の真実にしてオリジナルな思考の片鱗をうっかり見逃してしまうと語っている。それで彼女は‘宝の山’に分け入り、埋もれているのを掘り起こすかのように、あっちでもこっちでもメッケタ！とばかりに嬉々として語る。時折それも苦い後悔を伴いながら…。なぜならば自分が多くの歳月を経て苦労を重ね、どうにかやつのこと言い得たことながら、実はマーサ・ハリスがとつこの昔にそれを言っていると知ったときの驚きと狼狽、そして深い吐息。ああ、なんでもっとマーサ・ハリスから学んでおかなかったのか、彼女の論文にしる、なんでもっとしっかり読んでいなかったのかと、それで自分を責めているわけで…。それがアン・アルバレスなのかも知れないが、でも単純にマーサ・ハリスに対して彼女が‘聞く耳’を持たなかったということでもなかろう。それは誰にでもよくあること。おそらく物事の真実とは、それが心理臨床に絡んでいけば、それをそれとして自ら得心するためには幾つものトンネルを潜ってゆくことなのだから、時機が到来するまではそれも已むを得ないであろう。

だがそうしたことは別に、私には一つとんでもない‘メッケタ！’があった。それは、私にとって泣くに泣けない心の疼きを呼び覚まされた。この論文の中で、彼女は、‘良き内的対象’たるものとは何か、先ずその特徴の一つ「抱えること the holding」を取り上げ、その具体的な描写の中でなんと‘手’に言及していた！< 頭の上に置かれた手 (the hand on the head) は、赤子の心身を一に安らかとし (keep the baby’s person together)、その一方で悪いもの(腸内ガス)を排出させるといった母親の機能を再現するものと考えられましょう(p.16)> 詰まりは、母親の‘手’なるものが子どもにとっては慰撫であり、またデトックス(解毒)ともなろうというものだ。あまりにも思いがけず、私は息を呑んだ。まさか…！という思いであった。そんなはずがあろうかと…。私は混乱し、もはや焦点づけができず、そのままこの翻訳の下書きは寝かせられたままにしてあったというわけだ。

というのは、これには【タヴィストック】に在籍していた当時の或る‘不幸な記憶’が絡んでくる。【註；同ページ【無意識との邂逅】→《エピソード集》の「手なし娘の奇跡 2013/06/10」を参照されたい。】確か1977年頃だったか、フランス人の産婦人科医 Dr. フレデリック・レボワイエ(F. Leboyer)が【タヴィストック】に招聘され、講演をされた。その折にわれわれ聴衆は彼が持参した短篇フィルムを見させられた。タイトルは《loving hands(愛撫する手)》である。そこでは、若い母親が生後3、4ヶ月ほどの息子に‘赤ちゃんマッサージ’を施している光景が淡々と繰り広げられていた。その背景は、インド・カルカッタ郊外の鄙びた田舎、おそらく彼らの住まいの庭先と思われる。地面に莫産を敷き、そこに母親はサリーをまとい、裸足のまま、その伸ばした両脚の上に裸んぼうの赤子を乗せている。小鳥のさえずりも遠く聞え、木洩れ日の中でゆったりとした時が流れる。そこには言葉にはならない、母子の

‘語らい’があった。時折ウーウーウンと母親の唇から洩れ聞える調べのリフレンが心地いい。赤子もそれからだごと呼応するように低く呻きやら唸りやら盛んに声を発している。母親の頬に微笑みが浮かぶ。その手の仕草はしなやかで力強い。優美でたおやかですらあった。[因みに、Dr. LeboyarはこのShantala(シャンタラ)という若い母親の手業にいたく感動し、彼女に対して大いなるレスペクト(敬意/respect)を惜しまない。「暴力なき出産」の提唱者である彼がある！]そしてそのレクチュア・ルームから引き上げて、セミナー・ルームに戻ったときのことだ。Shirley Hoxterが開口一番、くよくよあんなものを見せてくれた・・・>とすごい剣幕で吼えた。唾棄すべきものといった感じで・・・そして次から次にそこに居並ぶタヴィ研修生の面々が同調した。拷問だのレイプだのと・・・子どもはあんなに嫌がっていたじゃないのよとヒステリックに喚くのだった。私は《loving hands》という映画のタイトルからしてもだが、母親の愛情が懐かしく心に沁みて、ほっこりとした思いでいたから、もう驚愕した。素晴らしかったなどと言える雰囲気ではなかった。私は自分が彼らとは異なる、なんだかひどく‘場違い’なところに居るということを思い知った。打ちのめされ、身を竦ませた。私なりに「タヴィストック・ファミリー」の一員として愛着を覚えていたわけだが、この一瞬私の【タヴィ】での存在基盤は陥没したのだった。そして、頭の中ではどうやらそれが彼らの中に温存されている大英帝国の植民地政策の‘負の遺産’であるということを考えざるを得なかった。あの素朴な母子の交流、そのあたたかで力強い手触りに隠微なものやら暴力的な匂いを嗅ぐということが彼らへの蔑視から来ているということなのだ。その彼らの驕り・尊大さに私の心は凍りついた。偏狭で頑なで、人間がいびつといえなくもない。そして、悲しみながらも同じアジア人種としての誇りと気概に火が付いた！ここから事態はこじれていった。まるっきり‘民族闘争’と化した感である。かつての世界の覇者たる大英帝国の輝かしき栄光を荷なう‘亡霊たち’をすべて敵に回したような具合で・・・【タヴィストック】の誰であろうと、心に‘手’が無い・言葉に‘手’が無い、そんなものがセラピストであるはずはない。‘親’として子を‘手塩に掛けていとおしむこと’を知らない彼らを私は内心大いに侮蔑した。こうして子育てにしろ、家事にしろ、全般に‘手’を軽視する彼らに、いわばぬくもりも慰めもない‘手抜き’の文化に対して宣戦布告したことになる。[ああ、ほんに今でこそ解るのだ。添い寝も知らず、おんぶも知らず、抱っこも必要最小限でしかなく、いい子いい子と頭を撫で撫でしてもらうことなど幼少期の彼らには決してありはしなかったろう。コット、バギーそしてバウンサーと、母親に抱えられる代わりにそうした補助具なら幾らでも揃っていたわけで・・・そうしたスキンシップのごく乏しい親子関係しか知らない彼らにとって、あの記録映画《loving hands》がどれほどの‘カルチャー・ショック’であったかということが・・・そして親子であろうと、自他の身体的境界 body-boundary は不可侵なのだから、赤ちゃんマッサージを快なる慰め(comfort)どころか、不快なる脅かし(threat)として受け取るのは彼らにとっては当然至極なのだとすることも・・・。だが当時は・・・。]

ここには個人的な思いが絡んでいる。私は、ごく幼い頃から、記憶にあるのは小学校の低学年までだが、母親によく頭が痛いやら足がだるいと訴える子どもだった。大概は就寝時であったが、母は私の傍らに横になって、私の頭を軽くトントンと叩いてくれるやら、脚を揉んでくれるやらしてくれた。一緒に半分うとうと眠りながら・・・だから、その幼い子どもの頃のわが母の「loving hands(愛撫する手)」が彼らに土足で踏みにじられた、穢(けが)されたといった被害意識が私の中で猛然と沸返ったということ

なのだ。これが事態をいっそうこじらせることになった原因ともいえる。病理といえば病理だが・・・。

事実私はクライン派のいうところの迫害不安(persecutory anxiety)なるものがピンときていなかった。そもそも迫害(persecution)というのが想像の外にあった。異国に独り暮らしていても、能天気というか無邪気というか。私はガンジーでも内村鑑三でもない。暴力で身を脅かされることも貧困ゆえに虐げられることもありはしなかった。むしろ意気軒昂そのもの、いじけてなどいなかった。迫害を己れの膚(はだ)で知ることは決してなかった。当時1970年代の後半、我国は国際的にも経済的競争力を身に付け、大いに盛り上がりを見せていた。日本から親が届けてくれたソニー製のカセットテープレコーダー付きのラジオにどれほど彼の地の人たちが熱いまなざしを向けたか、それは実に可笑しいほどだった。誇らしかった。日本人と聞けば、むこうはワンドラブル！と言う具合で・・・それに当時、ふとしたことで私を取り持ったご縁で日本と英国の錦鯉愛好家たちが繋がった。双方の「協会」が親交を深めるに至った。それは私の親にとっても誉れとなった。どれほど感謝されたか知れない。だから英国人に対して卑下する思いなど微塵もなかったし、肩身の狭い思いなどありはしない。だが、自分が彼らの「植民地」となることへの警戒心は当初からあったのは紛れもない事実で、この体験以降、不幸なことにそれが過熱した。【タヴィ】への帰属意識に修復しようもない亀裂を抱えたまま、私の内側は恐ろしくも疑心暗鬼のかたまりと化した。何がほんとに違うのか。比較文化の話でもあり、個々それぞれの生い立ちの話にもなろう。滅多なことでは話せなかった。だから、わが胸の内を彼の地の誰にも私はついぞ語らなかつた。そのとぼっちりが私のパーソナル・アナリシスであった。一時的にだが、セッションにも無断欠席を続けるという最悪の時期もあった。母親が悲しがるだろうと思い、辛うじて自分を抑えたけれども・・・。

そして、もはや「いい子の私 docile」ではなくなったわけで。彼らに屈することを潔しとしないというか、俄然彼らに安心して身を任せるといったことは止めたのだ。事あれば、ごねることをし始めた。研修例のスーパーバイザーを巡っても一つそうだが・・・。そもそも【タヴィストック】も‘一枚岩’ではないのは薄々承知していた。私は外から来たひとだから、いつかはここから居なくなる、だから彼らの間に波風を立てることは慎まねばならないというのがあった。間違っても不和・対立を煽ることはしたくなかつた。本当のことなど解らない、そして誰も本当のことなど言わない、と冷めていた。だから、誰にも打ち明けて相談しなかつた。誰をも頼らなかつた。そんな不幸な敵愾心の矛先がマーサ・ハリスやマーガレット・ラスティンに向けられたという記憶はない。が、それでもいくらか控え目となった。学ぶ身でありながら、彼らにはどうしても勝てないというその悔しさが執拗に居座っていた。精神分析も、その伝統を踏まえながら決して彼らの垂流などではなく、つまり‘植民地臭’のない、いつしか我らのもの(我が民族のもの)にしないでという気概を密かに抱いていた。ラッキーなことに、病院の直属の上司であったMr.ジョン・ブレンナーは、日本人による独創的な精神分析をぜひとも切り拓けと大いに奨励するひとであった。どうやら私には彼らに欠如している(無い)ものが有るらしい！【タヴィ】での研修は終盤を迎えており、臨床の場では辛うじて踏ん張っていたし、意気軒昂な自分をいくら取り戻していたともいえる。どれほど彼の地の人たちに私は助けられていたか知れない。だが、わが闘争は「我が闘争」であり、孤独であった。この頃のこと、永らく私の中で‘記憶喪失’になっている。やはり辛いものがあつたのだろう。

そして、今や私はかつての不遜とも言うべき己れの矜持に躓いている。マーサ・ハリスは1975年のこの論文で、なんと「母性のコンテインメント」の構成因子について語るのに、‘手’に注目している。知らなかった！彼女は‘手’を卑しむこの文明社会に警鐘を鳴らしていたのだ。子育ての環境のなかで‘手’が疎まれ廃れてゆこうとしている実態を憂慮していたのは間違いない。それでは、私と同じというわけか？！ 実は、娘のMeg Harris Williamが編纂したMartha HarrisとEsther Bickの論文が編纂された『Tavistock Mind』を手にした折、その後ろの参考文献リストを見ながら、そこにDr. Leboyerの『Birth without Violence』がふと目に留まったとき、アレッと意外に思った。普通精神分析の著作に文献として載るはずもないわけで。それではまさかではなく、もしかしたらという気がした。つまり、あの当時にDr. レボワイエを【タヴィストック】に招聘したのはDr. ボウルビイかと思っていたが、Mrs. ハリスであったということになる。‘手’が慰撫でもあり、デトックスでもあるといった観点は、インドの《アーユルヴェーダ》ではないか。どうやら彼女はDr. レボワイエの産婦人科医としての嗜好やら関心の行方に大いに興味を抱いていたものと覗かれる。彼が著作『Birth without Violence』を出版したのは1974年であり、彼女のこの論文は1975年である。そして1976年にレボワイエは現地に飛び、インド式赤ちゃんマッサージを撮影した。それがドキュメンタリー映画《Loving hands》なのだ。それから1977年には著作『Loving Hands』を出版したと聞いている。おそらく【タヴィ】での講演はその後になろう。おそらく間違いはない。ただ一つ、彼女の文章の中の《頭の上に置かれた手 the hand on the head》というのが引っかかった。彼女はどこでそれを見たのかしら？それで、ふと勘を頼りに Dr.レボワイエの著書『Birth without Violence(暴力なき出産)』のページを繰ってみた。するとメックタ！レボワイエの逞しい両手、それが赤子の頭に両側から包むようにして置かれてあった！赤子は目を瞑ったまま、ニカーッと喜色満面のほほえみを浮かべ、安らいでいた！この写真だわ！

それにしても、あの折の衝撃を内なる傷痕として引きずり、密かに彼らへの敵愾心を燃やしてこの歳月を思うとき、私は泣くに泣けない心の疼きを覚える。ああ、知らなかった。もしもこの1975年の彼女の論文を当時読んでいたならば・・・。なぜ、あの時にマーサ・ハリスに相談しなかったのか。私は信じていひとを頼らなかつた。そうした苦い後悔の念が湧き起こった。己れの不遜さに鞭打つ思いだつた。だがここで率直に言うなら、マーサ・ハリスのこの論文のこの箇所に一体誰がこれまで注目したというのだろうか。アルバレズが2012年に綴ったマーサ・ハリスを偲んでのこの追悼文の中でというのが本当に初めてなのだろうか？それも彼女ですら、この文中の‘手’に纏わるマーサ・ハリスの理解にはそれ以上深く立ち入って触れることはしていない。‘言語中心主義’の文化の中で、精神分析はその最先端をゆくものとしたら、やはりこれは‘異端視’されるしかないということのエビデンス(証拠)ではないか、ふと私はそう思った。いずれにしてもアルバレズに深く感謝したい。正直なところ、これで私も少しはすなおになれるといった気持ちだ(！?)。マーサ・ハリスの中に‘手’を発見できた。彼女が‘手’のあるサイコセラピスト(精神分析家)であったことは真実疑いようがない。それがどんなに安堵か。私はそれと知らずに彼女を引き継いでいたのだつた！‘誰かの子どもであること’の嬉しさをもう一度取り戻せる。そしてこの際、《タヴィストック・ファミリー》の列なりの中に加わってゆこうと思う。‘兄弟・姉妹たち’の仲間の中へ・・・。‘togetherness(一緒)’といういのちの交わりの輪の中へと・・・。(記; 2015/05/30)